

---

# ドライブ

kazuya

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドライブ

### 【Nコード】

N7130E

### 【作者名】

k a z u y a

### 【あらすじ】

久しぶりに彼女をドライブに誘ってみた。

## **(前書き)**

作者は免許を持っていますが車を持っていません…ドライブ行きてえ！

久しぶりに彼女をドライブに誘ってみた。

「久々の休みなんだから体を休めたらどう？」と彼女は言いたげではあったが「約束してただろ？」と半ば強引に彼女を助手席に座らせた。

僕はエンジンをかけ、車を発進させた。

彼女を乗せてドライブなんてするのはもう何年ぶりだろうか。

久々のことに意気込んでいる僕を見て彼女は笑っていたんだろう。運転中なので彼女の方は見なかったがそんな感じがした。

最近忙しくてあまり一緒に過ごすことが少なくなっていたのは確かだ。

僕は少し前、会社が力を入れているプロジェクトチームの一員に選ばれた。

仕事もやりがいがあるものを任されるようになった。

正直に言ってしまうえば由美のことはあまり見ていなかった。

由美は僕の恋人だ。

しかし彼女もまた僕と同じように仕事中心の生活を送っていた。

このままにしていれば特に理由もなく忙しさのせいにして僕らの関係は自然消滅してしまうだろう。

ただやっぱり僕は由美が好きだった。

物事に対して前向きで一生懸命であるところ。

少々頑張りすぎてしまうところが玉にきずであるがよく気が利くし、僕には勿体ないくらいだ。

いつだったか。

「僕のどこがいいの？」と付き合い始めた頃に由美に聞いたことがある。

すると由美は「自分を犠牲にしてまで人に優しくするところ」と

答えた。

僕は人からよく優しい人だと言われるが僕自身はそうは思わない。ただ自分に自信がないだけだった。

そんな僕の内面まで由美は見通していたのだろう。そのあとに「自分も大切にね」と由美は付け加えた。

はじめはお互いの仕事が落ち着いたら由美にプロポーズしようと思っていた。しかしお互い仕事のメドが立たず、ズルズルひきずるのも何かよくない気がしたので今度の休みに由美にプロポーズしようと思った。

優雅で高級なレストランを予約してディナーとワインでプロポーズということも考えたが僕はドライブを選んだ。

＊

由美との初デートはドライブだった。

学生時代に免許はとっていたが、車を買うことができたのは社会人になってからだった。

思いきって中古の車を買ったのは由美をドライブに誘うためだった。

大学時代に由美とは知り合った。

しかしその当時はまだ付き合っていなかった。友達でもなかった。

ただ一方的に僕が好意を寄せていただけだった。

卒業するときラストチャンスだと思ってダメ元で由美に思いを伝えた。

もしダメだったとしても由美に二度と会うことはないからだ。

僕の性格の代名詞のようなこの作戦はいい結果をもたらしたのだった。

ありきたりであるのは承知で海へ行こうと由美を誘うとすんなり応じてくれた。

隣に彼女を乗せて海までドライブという僕のひとつの理想であり  
言ってみれば自己満足でもあった。

ドライブ当日、出発して少し経つと雲行きが怪しくなってきた。  
さっきまで晴れていたのに困ったなと思っていると案の定雨が降  
りだして改めて自分の運の悪さをワイパーを見ながら感じていた。

「ついてないよな」と独り言のようにつぶやいていると由美は「  
私、雨って結構好きなの、運転気を付けてね。私の運転手さん」と  
笑顔で言ってくれた。

その言葉に僕は救われた。

少々落ち込んでいた僕に気を使って言ってくれたのだと思う。

そのときに大げさかもしれないが僕は「この人を幸せにしよう」  
と思ったことを覚えている。

あの頃の僕は単純だったなともう何年も前のことだけれど鮮明に  
覚えている。

＊

今日は雲ひとつない空でとても清々しい。

雨男の汚名返上だ。

やっと助手席の窓から海が見えてきた。あの日の思い出にもう少  
しで着く。

＊

ちょうど一週間前に由美をドライブに誘ったら「珍しいね、ドラ  
イブに誘うなんて。どうしたの？」って聞くから「久しぶりに休み  
が合うだろ？ たまにドライブしたいんだよ、昔みたいにとプロポ  
ーズのことは伏せていた。

「わかった、じゃあ次の休みね」とどこか不思議に思っている印  
象はあったが承諾してくれた。

行き先ははじめから海と決めていた。

雨の海でなく晴れの海へ。

その翌日久々に定刻に出社することができた。

まだ夕日がアスファルトを照らしている。

駅へ向かっていると携帯電話が鳴った。

由美からだった。

どうしたのだろうと電話をとると向こうから聞こえた声は由美のものではなかった。

取り乱した女性の声は嫌な予感を思わせた。

雑音が多くやっと聞き取れた声は「早く来てください」と「由美さんが大変です」の二つだけだった。

急いで由美の会社に向かったときにはすでに病院に運ばれていた。すぐに僕もそっちに向かったが遅かった。

原因は過労だったらしい。

頑張りすぎてしまうところが由美の短所だった。

そのことを良く知っていたはずなのに僕は何もできなかった。

葬儀が済んで僕は彼女の親戚が集まっている部屋から抜け出して外に出た。

さっきまで大勢の参列者が並んでいた場所、今は閑散としている。通夜の時、僕は参列者一人一人に頭を下げた。

それは形式的なものではなくお詫びの気持ちを込めたものだった。僕がしっかりしていなかったばかりに本当に申し訳ないことをしたと心のなかで繰り返した。

外に出てみると空は今にも雨が降りそうで雲は僕がその色に染めたのではないかと思うくらい黒ずんでいた。

昨日夜通し泣いて目を腫らした僕に二人の女性が声をかけてきた。僕は頭を下げて何か言おうとしたがそれをさえぎるように向こうから話してきた。

「私たちが言うのも何ですけど自分のことを責めないでください」「え?。」

その言葉は由美自身が言っているようにきこえた。

彼女たちは由美の後輩だった。

「由美さんは幸せだったと思います。知ってますか。由美さん、いつも真剣な表情で仕事に取り組んで自分の仕事が終わるとまだ未熟な私たちの仕事まで手伝ってくれるんです。本当に頼りになる先輩でした。でもあなたの話になると顔が幼い女の子みたいになってくしゃくしゃの笑顔であなたのことを話してくれるんです。この前も今度ドライブに連れていってくれるんだって嬉しそうでした。私たち由美さんがすごい羨ましかったですよ」

そう僕に訴えかけるように彼女たちは言った。

＊

やっと海に着いた。

人氣がなく波も穏やかで窓を開けると風が心地よい。

「着いたぞ」

そう助手席に向かって言う。

枯れてしまったはずの涙はまだ僕の中に残ってたようだ。

＊

由美の後輩はこんなことも話してくれた。

「『素敵な由美さんあつての彼氏さんですよ、羨ましいなあ』って由美さんに言ったら『私なんて全然ダメよ。自分の体のコントロールも出来ないんだから。彼に迷惑かけてばかり。でも彼も忙しいのに大丈夫かって自分より私のことを心配してくれるのよ。私にはもったいないくらいの彼氏よ』って言うんですよ」

＊



助手席の小さくなった由美を僕の頼りない腕できつく抱き締めた。

「由美、結婚しよう」

**(後書き)**

読んでいただきありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7130e/>

---

ドライブ

2010年10月8日15時29分発行